

学校DX戦略コーディネータ概論【Ⅲ】

未来を創る教育設計 ～カリキュラム開発の新しい視点～

第2講 日本の学校カリキュラム開発の歴史

安彦忠彦（名古屋大学・名誉教授）

第2講 日本の学校カリキュラム開発の歴史

【目 的】

学校での「カリキュラム（づくり）」(ここでは「つくり」を「開発」と呼ぶ)について、その基礎知識としての歴史的な流れを、世界を視野に入れつつ、主に日本を中心に概観し、今後のカリキュラムづくり(開発)のための展望を得ることを目的とする。

【学修到達目標】

- ① 古代から現代に至るまでのカリキュラム開発の歴史的変遷を理解し、主要な教育思想や改革の影響を具体的に説明することができる。
- ② 特定の時代や教育思想に基づくカリキュラムの特徴を分析し、それがどのように学習者のニーズや社会の要求に応じて変化してきたかを論じることができる。
- ③ カリキュラム開発の歴史を踏まえ、現代の教育課題や社会的ニーズに応じた未来のカリキュラムの改善点や新たな提案を具体的に示すことができる。

1. 古代～中世の教育：教養と神学

古代ギリシャ：

アテナイ（スコレー、自由七科）

古代ローマ：

国家への忠誠心

中世：

キリスト教神学中心、「自由学芸」を基礎に採用。

2. 「カリキュラム」用語の誕生

16世紀：

大学改革（ライデン大学など）で、教育内容の「方法的な一般化・明確化」の動き

ラテン語 *currere* (走る)を語源とする「カリキュラム」が「コース（課程）」として初めて明示される。

3. 近代以降の人間観と教育の変化

17世紀・18世紀（啓蒙の時代）：

「自然科学」の発展

人間観が「生来悪」から「生来善」へ転換

J.J.ルソーの消極教育思想「自然に帰れ！」

4. 20世紀：「子供中心」への転換

E.ケイ：

「20世紀は児童の世紀」

デューイ：

「経験学習」を提唱し、従来の教科学習を相対化。カリキュラムは「子供の経験とその拡大」へ

5. 現代社会とカリキュラム開発の課題

現代の課題：

地球環境問題（原爆・環境汚染）、高度情報化（ICT・AI）が人間の制御能力を超える可能性。

6. 求められるカリキュラムの総合

展望：

子供主体と学問研究を重んじる人間育成。教科カリキュラム（学問）と教科外カリキュラム（経験）を、目的・成長に応じて総合することが必要。

7. 江戸時代までの教育：儒学と庶民の学び

足利学校

(儒学中心、高等教育レベル)

藩校・郷学

(武士・庶民、儒学、読み書き算数)

寺子屋：

庶民教育の担い手、識字率向上に貢献（読み書き・算盤）。

8. 明治～戦前の近代学校制度と国家主義

1872年「学制」：

近代公教育の基本形（小学校→中学校→大学）を
確立。欧米風教科

「改正教育令」以降：

国家主義的な教科カリキュラムへ移行。修身が必修化。

9．戦前の教科カリキュラムの骨格

国民学校令期（戦時下）：

国民科、理数科、体錬科など大教科制へ移行したが、その骨格は修身・国語・算術・体操が中心の国家主義的。

10．戦後の新教育体制の確立

1947年：

新憲法・教育基本法のもと、複線型から単線型学校体系へ移行

教育の機会均等保障

「教科と教科外活動」から成るカリキュラムへ
(経験主義の影響)。

1 1. 学習指導要領の始まりと法的拘束力

1947年：

学習指導要領（Course of Study）が試案として登場

1958年：

官報告示され、国家基準としての法的拘束力を持つ。

1 2. 「学力論争」と指導要領の揺れ

1951年改訂：

経験主義・児童中心主義、特別教育活動導入

1956年：

全国学力テスト→学力論争

「子供重視の経験主義」から「教科重視の系統主義」へ転換（1958年改訂）

1 3. 戦後以降の主な活動・経験重視の導入

教科外活動の導入変遷：

自由研究（1947）

特別教育活動（1951→特別活動）

道徳の時間（1958）

生活科（1989）

総合的な学習の時間（1999）

外国語活動（2008）

1 4. 学習指導要領の主な改訂の変遷 (1958年～2008年)

- 1958 (系統学習)
- 1968 (現代化)
- 1977 (ゆとり)
- 1989 (生活科)
- 1999 (生きる力、総合学習)
- 2008 (授業時数増、外国語活動)

1 5. 現行の学習指導要領（2017年改訂）

生きる力」の踏襲

「主体的・対話的で深い学び」

資質・能力の三要素

（知識・技能、思考力等、学びに向かう力等）

カリキュラム・マネジメント重視

「社会に開かれた教育課程」づくりを企図。

1 6．現行改訂作業の方向性（2024年～）

2030年度実施に向けた中教審「論点整理」

現行の継続＋「子供の個別最適で協働的な学び」
と「高度情報化への対応」を念頭に置く

重点が「社会」から「子供個々人」へ移動。

17. 今後のカリキュラム開発で 配慮すべき諸点①

引き続き：

「子供を未来の主権者として第一に尊重する」

① 地球環境問題への対応：

SDGsを含む地球環境の悪化への責任
持続可能な状態の保持。

18. 今後のカリキュラム開発で 配慮すべき諸点②・③

② 核(戦争)問題への対応：

平和希求、核汚染・核戦争を起こさない世界の確立。

③ 高度情報化社会における人間倫理の確立：

「自己(能力)開発型」から「自己(能力)制御型」への重点移動、「不完全で謙虚な人間性」の自覚を基礎にする行動原理。

課 題

- ① 特定の時代（例：古代ギリシャ、中世、近代など）のカリキュラムを選び、その特徴や教育思想、社会的背景を分析したレポートを作成する。
- ② 特定の教育思想家（例：ジョン・デューイ、ルソーなど）を選び、その思想がカリキュラム開発に与えた影響について研究し、プレゼンテーション形式で発表する。
- ③ カリキュラム開発の歴史を踏まえ、現代の教育課題や社会的ニーズに応じた未来のカリキュラムの改善点や新たな提案をまとめた提案書を作成する。

第2講 日本の学校カリキュラム開発の歴史

【目 的】

学校での「カリキュラム（づくり）」(ここでは「つくり」を「開発」と呼ぶ)について、その基礎知識としての歴史的な流れを、世界を視野に入れつつ、主に日本を中心に概観し、今後のカリキュラムづくり(開発)のための展望を得ることを目的とする。

【学修到達目標】

- ① 古代から現代に至るまでのカリキュラム開発の歴史的変遷を理解し、主要な教育思想や改革の影響を具体的に説明することができる。
- ② 特定の時代や教育思想に基づくカリキュラムの特徴を分析し、それがどのように学習者のニーズや社会の要求に応じて変化してきたかを論じることができる。
- ③ カリキュラム開発の歴史を踏まえ、現代の教育課題や社会的ニーズに応じた未来のカリキュラムの改善点や新たな提案を具体的に示すことができる。

学校DX戦略コーディネータ概論【Ⅲ】 ～ 未来を創る教育設計：カリキュラム開発の新しい視点 ～

第2講 日本の学校カリキュラム開発の歴史

安彦忠彦（名古屋大学名誉教授）